

「寛文七年金沢図」等に見る医者の居住地と城内での医療

池田 仁子

はじめに

近世城下町に関して、これまで都市プランや町割の形成、経済活動の仕組等の観点から分析がなされ、とりわけ空間構造の類型研究で金沢は複合城下町という評価も出された⁽¹⁾。また、当町に加賀藩重臣の屋敷図の解説も進み⁽²⁾、さらに、町人の生活や藩の重臣の生活についての研究⁽³⁾のほか、筆者は暮らしの中の医者を取扱い、当藩領内の医者には藩医、重臣召抱の家中医、町医・村医等がいることを指摘した⁽⁴⁾。一方、疾病史の視点からの考察⁽⁵⁾、或いは金沢城普請と医療に関する論述⁽⁶⁾、重臣の医療に関する論考⁽⁷⁾、蘭学と医者の動向について考究したものなど⁽⁸⁾、医者や医療関連の論考も多彩である。生活史という分野は広範ではあるが、従来の諸研究を踏まえ、膨大な未刊史料や絵図を駆使しながら加賀藩のこの分野の研究が必要と考える。

本稿では石川県立図書館蔵の「寛文七年金沢図」(560×501㌢、以下、寛文七年図と略記)及び「延宝金沢図」(590×545㌢、以下、延宝図と略記)において、今回新たな調査から藩医の居住地を確認し、2図を比較検討する。合せて各藩医の履歴を検索しながら、医者の居住地の意味や寛文七年図の意義について考える。次に、金沢城内での藩主前田家の暮らしにおける医療に関し、右2図記載の医者やその子孫等の諸活動について垣間見る。特に藩主の側近や重臣の日記類などを活用、検索しながら医者の活動を把握する。これら金沢城の二ノ丸及び金谷出丸等の建物築造の時期や利用などの面で藩主前田家の奥向に関連しながら、医療や医者の諸活動を考察し、近世城下町生活史解明の一助にしたい。

なお、近世日本の医学の流れを概観すると、およそ、〔A〕元和～宝永期(中国の13から14世紀以来の李朱医方の影響を受けた医方が後世方として確立し、同様に中国3世紀の『傷寒論』を至上とする古医方が新たに興る)、〔B〕享保～天明頃(古医方が漢方の主流となり、蘭学も影響し始める)、〔C〕寛政～幕末迄(各説の折衷派が活躍)の3期に区分される⁽⁹⁾。本稿では、ほぼ右〔A〕の時期に相当する近世初期から貞享期頃までの事例についてみていく。

一、藩医の住居位置と履歴―「寛文七年金沢図」と「延宝金沢図」の比較検討―

「慶長年中御家中分限帳」(金沢市立玉川図書館加越能文庫「慶長延宝加陽分限帳」)から医者を検索すると、少なくとも300石の覚中(内山)・長庵(山科)・慶庵(高田)、200石の里庵(飛鳥井)・道甫、150石の沢田道加・養軒(不破、外科)、100石の不乱(名倉)の8名程が確認できる。ここでは、いわば戦乱終結以前の武断的要素の強い藩政初期にすでに複数の藩医が召抱えられ、彼らは戦闘による傷病兵も手当したことが推測される。右の内、内山覚中(初代、寛永4年没)は毛利元就の家人内山土佐の次男で、慶長11年(1606)富山で前田利長に仕え、これが本道の藩医の嚆矢という⁽¹⁰⁾。さらに、「新山田畔書」(3巻、加越能文庫)寛永18年条に「金瘡(刀傷)ノ不乱坊」(右の名倉)と見え、また、延宝3年(1675)の侍帳(「慶長延宝加陽分限帳」)には本道医師・外科・目医者・歯医師等28人程の中に「金瘡」の医師として小林幸庵(初代、100石)・生田丈仙(金子5枚)が記され興味深い。

さて、寛文七年図には今回の調査で武家屋敷・藩用地・寺社・町屋など3653の文字件数を確認したが、人名記載1757件(総括論文)の内、藩医の居住位置について、[図1]に[表1]のA～L及び★印補遺の分を含め、計42人を示した。[図1]では藩医が金沢城の内及び外総構の内側乃至その近辺に屋敷を拝領したことが読み取れる。また、[表1]では内・外総構堀の内側に関しては、寛文七年図・延宝図の2図ともそれぞれ調査対象にしたため、*印のように寛文七年図になく、延宝図のみ記載ある医者もピックアップできたが、外総構堀の外側に限っては、寛文七年図を中心にし、延宝図で同屋敷

地の記載はどうかを検索したものである。したがって、延宝図の外総構堀の外側に関しては、寛文七年図になく、延宝図のみにある場合なども含め今回は悉皆調査には及ばなかった。

〔表1〕では、藩医42人中、★印補遺の小林幸庵を含めアの道慶からミの高木宗三までのおよそ8割に当たる33人が総構の内側に屋敷を拝領している。この内金沢城に最も近い位置のC地区に長崎・江間・大石・加藤・坂井のほか藤田2家など8家が密集しており、これらは居住当初藩主前田家の医療担当者として最重要視されていたことが想定される。また、外総構堀の外側に居住するのはム、の矢田周閑よりルの益庵までの9人で、彼らもやはり西総構堀に比較的近い所に屋敷を拝領している。右の高木の屋敷地は「永代地子」銀を納める請地である。さらに、クの坂井とホの小瀬の両家に親戚関係を有するチの堀部養叔は史料に頻出し（後述）、その居住位置をみると西内総構と西外総構の間に挟まれ、「御子々姓（延宝5年奥小將に改称）御長屋々敷」に隣接し、金谷出丸や二ノ丸に近く、養叔が藩主前田家の医療担当上、距離的かつ信頼性において重要な位置を占めていたことを物語っている。

なお、〔表1〕以外に寛文11年（1671）侍帳（県立図書館森田文庫）には次の医者記載がある。【生田丈仙】36歳、黄金5枚、外30人扶持、組外、外科。【大知坊法橋】馬嶋、69歳、黄金5枚、組外。



〔図1〕「寛文七年金沢図」にみる藩医の居住位置

（石川県立図書館蔵の図（部分）の上に〔表1〕のア～ル及び★印補遺の藩医の屋敷位置等を加工表示した。全体図は本書折込図を参照）

〔表1〕「寛文七年金沢図」・「延宝金沢図」にみる医者一覧

記号等	「寛文七年金沢図」							「延宝金沢図」	
	地区	街区	地番	藩医名	分類	寛文11年侍帳、〈同元年侍帳〉〔諸士系譜〕等記事	石高	藩医名	寛文11年侍帳、〔諸士系譜〕等記事
ア	C	02	04	いしや道慶	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○(医師道慶)	
イ	C	02	08	(長崎)林正	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○(長崎林正)	
ウ	C	02	09	江間慶寿	35	〔竹林坊〕、42才組外、歯医者	100	○(江間)	
エ	C	03	03	大石玄哲	35	〔大石三折の父〕	(200)	大石三雪(折)	39才組外、医者200石
オ	C	03	04	藤田三雪	35	(藤田玄碩の父か)	(150)	藤田玄碩	41才組外、医師150石
カ	C	03	05	加藤正悦	35	76才組外、医師	200	加藤玄幸(玄好)	(「延宝分限帳」10人扶持)
キ	C	03	07	藤田玄仙	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○	
ク	C	03	08	坂井就安(寿庵)	35	63才組外、医師	200	○	
ケ	D	01	07	医者宗芸	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○(医師宗芸)	
コ	D	01	12	いしや玄古	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	(町屋)	
サ	E	01	04	いしや玄益	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○	
シ	F	01	01	目いしや(佐々木)寿徳	×45	(「金沢之図」「佐々木」)	×	○	
ス	F	02	13	いしや 宗献	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○	
セ	F	02	16	佐々正益	35	〈医師〉〔寛文9年没〕	(300)	佐々長録(琢)	[正益孫、快安の子、20人扶持]
ソ	F	02	26	いしや三叔	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○(医師三叔)	
タ	F	03	02	玄碩	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○(いしや玄碩)	
チ	F	04	10	堀部養叔	35	51才組外、医師	200	○	
ツ	F	04	21	高田友庵	35	50才組外、医師〔祐庵〕	200	○	
テ	G	02	16	いしや見の	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	(地子)	
ト	G	03	08	いしや(内山)覚仲(2代目)	35	77才組外、医師 覚中	100	○(内山覚仲)	
ナ	G	03	16	江間慶嘉(慶賀)	35	42才組外、歯医師	60俵	○(慶嘉)	
★	H	04	20	小林幸庵	35	(「延宝分限帳」「金瘡」)	(100)	(小林源太郎)	4才7人扶持〔幸庵孫〕
ニ	H	04	34	いしや(津田)宗意	×45	(寛永4年侍帳「津田宗意」か、子か)	×	医師道伯	
ヌ	H	04	40	山脇玄悦	35	57才組外、医師	200	○	
ネ	H	05	20	いしや正碩	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○	
ノ	H	05	25	不破養伯	35	36才組外、外科	150	○	
ハ	H	06	14	はりたて(久保)寿斎	35	65才組外、鍼医「久保寿斎」	100	○(久保寿斎)	
ヒ	H	07	14	いしや(鈴木)道悦	35	(「延宝分限帳」「鈴木」)	(300)	○	
フ	H	07	23	渡部休庵	×45	(「手記」19巻「渡辺玖庵」)	×	○	
ヘ	H	07	40	いしや正寿	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○	
＊	I	03	03	(野村関之助)				いしや(藤田)ト庵	「金沢古蹟志」8巻「藤田」
ホ	I	03	04	小瀬甫庵(2代目)	35	64才書物奉行、組外、医師	200	小瀬順理〔又四郎〕	
マ	I	03	12	いしや正栄	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○	
ミ	J	04	04	いしや高木宗三 永代地子	75	該当なし	×	○(いしや宗三地子)	
ム	L	03	06	外科(矢田)周閑	35	45才組外、外科	150	○(矢田周閑)	
メ	L	03	12	いしや(磯野)玄察	×45	(「手記」3巻「磯野」)	×	○	
モ	M	05	32	針立正安	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○	
ヤ	M	07	14	外科(黒川)覚針	×45	(「手記」3巻「黒川」)	×	○	
ユ	N	01	05	能瀬玄竹	35	44才組外、外科〔元禄7年没〕	150	○	
ヨ	N	01	10	堀部養佐	35	40才組外、医師〔養叔弟〕	150	○	
ラ	N	01	33	堀宗佐	35	65才組外、外科	小判10両	○	
リ	N	17	39	外科(名倉)幸春	35	46才組外、外科	150	外科(名倉)幸伯	「延宝分限帳」10人扶持
ル	O	13	23	医者益庵	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	○(いしや益庵)	

本表は総括論文の1表より医者を抽出し、加筆・改稿したもので、★印は補遺の分である。分類では35は組外平士並身分を、45は御歩並身分を、また、「延宝金沢図」の記載が「寛文七年金沢図」と同一の場合は○を、() は医者以外、×印は不明を示し、「金沢之図」は金沢市立玉川図書館蔵(19、9-76)で、「手記」は「前田貞親手記」(同館加越能文庫)、「延宝分限帳」は「慶長延宝加陽分限帳」(同)の略記である。「諸士系譜」(加越能文庫)、「金沢古蹟志」(石川県立図書館森田文庫)、寛文11年侍帳(同)のほかは「加賀藩初期の侍帳」(復刻、石川県立図書館協会、昭和15年)を活用した。なお、佐々正益・小林幸庵・鈴木道悦に関し、総括論文1表の分類欄は「×45」だが、校正段階で彼らが侍帳・分限帳に登録されていることがわかり、試みに「35」に改め、石高も各これらに依った。

目医師。【亨徳院法眼】曲直瀬、41歳、300俵大坂着米、組外、医師。【佐々玄養】21歳、10人扶持、組外、医師。【佐々快安】57歳、150石、組外、医師。【鈴木道論(倫)】54歳、300石、組外、医師。【富山周甫】61歳、200石、組外、外科。【堀部宗叔】31歳、150石、組外、外科。堀部宗佐の子。

右佐々家につき〔表1〕のように寛文七年図は隠居中の正益(寛文元年致仕)の名を、また同人没

後の寛文11年侍帳は正益嫡子快安（寛文元年相続）の名を登載、翌12年快安死去により、延宝図は快安嫡子長琢を記載する。同様のケースは小林家でも幸庵・源右衛門・源太郎と代替りする（「諸士系譜」）。このように、寛文・延宝の短期間に当主が3代出現する事例が確認され、今後他家に関しても2図の記載事情や時期等比較検討が期待される。

さらに、[表1]で寛文七年図の居住藩医42人の内、延宝図ではほぼ同一人とみられるのは32人で、二の道伯とりの幸伯等を含め工の大石、オの藤田、力の加藤のほか、前述のセの佐々、★印補遺の小林等は各々寛文七年図の医者の子や孫である。それ以外、屋敷地がほかに転用されたのはコの町屋とテの地子地の2例のみである。したがって、医者の居住地に関しては、42例中、40例が寛文7年時居住の本人もしくは子か孫が延宝期にもその屋敷地に居住しており、この点で両図の間で大きな相違は見られない。また、寛文・延宝期の藩医の石高や給金は300石から小判10両程までで、寛文11年侍帳に記載の者は多くは平士並身分で、藩士として原則的には軍事編成上は組外だが⁽¹¹⁾、他方、苗字のない寛文七年図記載の医者の内、同侍帳にも無記載の者の多くは御歩並身分とみられ、両者とも金沢居住の者は屋敷を拝領し、2図に記載されたものと解せる。かくして、七年図記載の医者42人（[表1]）は今後の研究によっては増える場合もあり得る。一方、寛文七年図と11年侍帳では4年の差があり、同侍帳では人物比定できる者も含め寛文七年図記載の16人及び同図以外の8人の合計24人の記載しかなく、この中には京詰の亨徳院のような金沢居住以外の者も含まれる。右亨徳院（曲直瀬）は延宝5年侍帳（十村後藤家文書、石川県立歴史博物館蔵）に「京薬師」47才、「御借し小屋」と見える。この亨徳院は日本医学の中興の祖曲直瀬正盛の後裔、曲直瀬玄承（延宝2年500俵、延宝5年没）であることは「先祖由緒并一類附帳」（明治3年、曲直瀬安治郎、加越能文庫）でわかる⁽¹²⁾。

また、寛文七年図に不記で、寛文11年侍帳記載の鈴木道倫（寛文七年図及び延宝3年分限帳記載の鈴木道悦（300石）との関係は不詳）に関しては、延宝5年侍帳に「江戸」と見え、また、同8年綱紀の在江戸期間中、江戸の姫方の医療を担当している（後述）。貞享4年段階でも江戸の中屋敷詰で（「前田貞親手記」12巻）、また、堀部養叔・坂井泰順・矢田周閑・江間口安等に「江戸往来」の手当が下賜されている際、道倫にはその記載が見えない（「同」14巻）。したがって、右堀部ら4名が江戸と金沢を往来し、両地で前田家等の診療に携わったのとは異なり、少なくとも延宝から貞享期、道倫は江戸定府の可能性もある。さらに、江間竹林坊のような事例から、ほぼ同時期における同一人物と推測される医者について、寛文七年図記載の人物名が「諸士系譜」（金沢市立玉川図書館加越能文庫）の人物名と相違する者もあり、また、改名する場合も少なくない。さらに、寛文七年図記載上と「諸士系譜」記載上の相違があることも考えられ、一層複雑さを極めていく点も否めない。

二、城内での医療—藩主前田綱紀と恭姫・豊姫の事例—

（1）綱紀の病状と治療

延宝元年藩主綱紀に近侍し（250石、のち850石）、天和2年奥小将、元禄3年再び近侍した葛巻昌興（大野木高俊、多門、権佐、昌信）自筆日記「葛巻昌興日記」（27冊、加越能文庫、延宝5年～元禄5年）より医者や城内での診療に関して概観しよう。その前に寛文七年図記載の佐々正益の孫佐々常憲（政尚）は寛文11年侍帳に近習と見え、同様に寛文七年図の山脇玄悦の子山脇春硯（作大夫）も近習とみえるなど医者や薬事の系統を引く者が藩主の近習方を勤めていることは興味深い。

延宝8年江戸で綱紀は口中を患い、同地の町医者本賀徳明に付け薬の治療を受け、また、坂井泰順・鈴木道倫らは姫方の診療につき常々仰付の筋とは相違する事態となり、閉門を申付られる。同年金沢へ帰国した綱紀は、大聖寺藩主前田利明が中気で倒れたのに際し、治療のため堀部養叔を派遣する。翌9年堀部養叔・山脇玄悦は300石、坂井泰順は新知200石を拝領する。これによれば、泰順の閉門は半年余で赦免となり、新知拝領の形を採ったものとみられる。また、泰順は「前田貞親手記」（後述）に貞享期「赤龍丹」「万病円」という薬を調合する記事が見え（[表2]）、同人の著書に「加能所産薬

草考」がある点注目される⁽¹³⁾。

坂井泰順の祖父は就安（初代、「諸士系譜」では乾安）といい、小瀬甫庵の実子で200石である。この初代甫庵は著書「太閤記」で高名な医者で、寛永元年（1624）加賀藩に出仕、同17年没する。2代目甫庵は婿養子であり、実は池田治部左衛門甥で、寛文七年図（〔表1〕のへ）に見えるのは2代目甫庵に比定できる。同人の嗣子は堀部養叔二男又四郎といい、延宝図に右寛文図の同地番に住む小瀬順理である（「諸士系譜」、森田文庫「金沢古蹟志」8巻）。さて、初代坂井就安は実父小瀬甫庵（初代）より先、慶長19年加賀藩に出仕し、石川郡野々市の代官を勤め、元和の侍帳に無役衆、200石、坂井寿庵として見え、寛永4年侍帳に「御薬師衆」と記され、寛永15年没する⁽¹⁴⁾。また、坂井泰順の父は祖父と同様就安（2代目、乾安、200石、元禄8年没）といい、〔表1〕に示したように寛文七年図及び延宝図記載の人物である。さらに泰順の嗣子は小瀬復庵（坂井順元、430石）であり、その妻は堀部養叔嫡子養碩の娘であるなど、坂井・小瀬・堀部の3家における姻戚関係を知ることが出来る。

さて、再び江戸参勤となった延宝9年5月、綱紀は度々杉山検校の鍼治療を受け、この後も鍼治療は続くが、同人は「葛巻昌興日記」にも見える杉山和一である。將軍綱吉の病を治し、のち杉山流鍼術を振興させ、幕府が保護した盲人団体の最高位、関東総検校として絶大な権力をもった⁽¹⁵⁾。このほか、天和元年から貞享3年の間、江戸で綱紀は井関玄悦（曲直瀬玄朔〈1549～1631〉の弟子）・今大路道三（曲直瀬親俊、延寿院）・吉田意安などの脈診・投薬・治療を受ける。また、貞享3年9月、綱紀は御灸による足の痛みがもとで体調不良となり、御稽古能を3日後に延期する。なお、灸痛は前田備前貞親においても勤務困難の激痛の事例が確認できる（「前田貞親手記」貞享5年5月7～13日）。

次に、「前田貞親手記」（65冊、加越能文庫、貞享3年～元禄15年、以下「手記」と略記）は貞享3年（1686）若年寄、元禄4年（1691）家老（宝永4年没まで）、この間元禄16年小松城代を勤めた前田貞親の著で、これを明治期に前田家編輯方が手写したものである。全体的に大部であるため、本稿では右65冊のうち1～20巻までの貞享3年11月から同5年8月（貞享5年9月30日に元禄元年と改元）までを主に対象とし、医療と医者との動向について垣間見る。

〔表2〕貞享期金沢城内での藩主綱紀の御様躰と医者との診療活動

（「前田貞親手記」等より作成。姫の診療に関しては別表とした）

年（綱紀年齢）、記載月日、主要記事
貞享3年（44歳）11月16日頭重く、鼻中より出血、鼻入口に御出来、腹痛え、後髪際や肩腕腰だるく、昨晚喉内痛く、養叔御脈拝診、寒気故の御逆上せと診断、薬調合、差上。17日風邪、清涕出て、鼻詰り、舌渴き、鼻中余程痛く出血、咳出、睡眠に支障、養叔脈診、脈拍数多いと診断、薬調合差上。19日少々快方、養叔薬二貼調進。20日養叔脈診、脈拍数多く、薬二貼調進。21日依然風邪気味、咳痛、薬加味調進。22日前田備後中症左半身不随、久保定興鍼治療。23日養叔薬二貼調進。28日養叔年寄女中中山を診療、薬処方。 12月8日端玄川拝診、其他女中病気療治に付、当暮銀子下賜の旨仰出。○坂井泰順赤龍丹を再調合。人參は御納戸内より取出、他は会所奉行へ談じ薬種を調達。22日泰順赤龍丹調合済み、一器差上。24日養叔拝診、逆上せ・胸痞え・頭痛、薬二貼調進。25日養叔へ白銀・羽織下賜の旨仰出。○養叔拝診、若干御快方、左方脈拍数多く、薬二貼調進。27日気色変化なく薬調進。29日御氣逆上せに付薬調進。
同4年（45歳）正月18・19日漆仕立の甘酒は虫疝気等養生に良き旨養叔回答。外科矢田周閑、歯医師江間口安参勤御供決定。25日藤田玄仙・渡部玖庵・磯野玄察・黒川覺針御目見願却下。26日養叔参勤道中御供人急病の際、二から七町内に参上の旨申渡。28日坂井泰順金沢より江戸へ発足の命。晦日泰順来月2日頃出立予定。 2月12日一柳監物目思い、馬嶋柳庵昨日より診察、鍼治療、20日過鍼予定。 3月1日知行割付に付医者は三ツ五分、四ツの旨申渡。6・21・24日養叔孫勝之助養子御徒組召出願、御請。8日養叔拝診、若干逆上せ、足腫氣、食細気味。
貞享5年（46歳）6月20日養叔拝診、御腹痛え、九愈に御灸。21・22日端玄仙長九郎左衛門診療に付白銀・羽織等下賜。24日養叔拝診、若干御不快、御小水色有り、薬二貼調進。27日養叔拝診、鳩尾御痞え、背張り、若干脈拍数多く、薬二貼調進。

なお、金沢城二ノ丸御殿中、藩主綱紀の私生活は御居間廻りといわれる空間で営まれ⁽¹⁶⁾、医者による診療もここでなされたものとみられる。

[表2]より金沢での綱紀の病状についてみていくと、貞享3年11月には鼻中に腫物が出来、出血、腹具合が悪く、後髪生え際や肩・腕・腰の辺も「したるく」(だるく)、喉は痛み、咳、寒気による逆上せ、風邪、清涕、鼻詰りが有り、脈拍数が多いといった「様躰」であった。同4年正月・2月は特記するようなことは起こらなかったのか、比較的健康で過ごしたものとみられ、3月には若干の逆上せや足に腫れがあり、食欲不振であった。この後綱紀は江戸参勤だが、明けて5年6月再び金沢での生活が始まり、腹や鳩尾の痞え、小水に色有り、背張り、脈は若干浮大気味であった。これに対する城内での医者による治療の様子を概観すると、殆ど堀部養叔が脈診の上、薬を調進し、或いは九兪(背中にある灸の要点)に御灸をしており、この時期綱紀の主治医は本道(内科)医師の養叔であったことがわかる。補助として本道は端玄仙(川)が、外科は矢田周閑が、歯医師は江間口安が各々勤め、前述の如く、坂井泰順が薬の調合を行なう。このほか、その理由など詳細は不明だが、藤田玄仙・渡部玖庵・磯野玄察・黒川覚針は御目見を願出るが却下される。さらに、右玄仙は藩老長九郎左衛門を診察し、また、馬嶋柳庵は城下木ノ新保持明院北隣の屋敷地(総括論文、IV表、O-15-01)に御預けの身となっている元伊予西条城主一柳監物(1624~1702)の眼を診察し、針治療を行なっている。なお、右馬嶋柳庵は馬嶋大知坊(前述)の子で(「手記」貞享5年2月7日条)、南北朝期清眼僧都創始の馬嶋流眼科の医者であろう⁽¹⁷⁾。

ともあれ、堀部養叔らは綱紀の病気が重い時は毎日診療の記載が「手記」に見え、おそらく健康維持のため殆ど常時拝診の姿勢でいたのであろう。養叔は元禄7年に没するが、特に綱紀の信頼篤かったとみられ、後述のように豊姫の診察にも関わり、また、漆樹の皮の煎汁で造った甘酒を飲むことは養生に良いか諮問を受け、「本草綱目」に漆酒は見えないが、乾漆の性質は咳や腹中の殺虫、瘀血の疵口や腰痛に効き、長く服用すれば身は軽く老を防ぐゆえ、御前が漆甘酒を召上ることは然るべきと答えている。真偽は不詳だが、乾漆は充血剤・駆虫剤・咳止め薬などに使用されるゆえ、養叔の見解はそれなりの根拠あることともいえようか。

ところで、加賀藩の職制の整備は綱紀の代に本格化し、寛文9年若年寄が設置され、貞享3年の職制改革で老臣の職が明文化された。しかし、藩老・家老・若年寄の支配区分が必ずしも明確ではなく、かつ複雑で、例えば人事に関する仰渡は、直接藩老・家老・若年寄から行なう場合と支配頭等を介して行なう場合があり、役方の職務支配は、支配という緩やかな拘束と人事や法令の伝達システムとしてのみ機能したという⁽¹⁸⁾。また、藩主に近侍し、御用を勤める近侍御用には藩主の私的な面を近習方、公的な面を奏者方が各々担当した。また、「寺社方并支配方勤方覚」によれば、藩医は明和8年(1771)段階で寺社奉行の支配下に置かれているが⁽¹⁹⁾、ここで藩医の一族の身分・役職に関する事例を挙げよう。養叔の孫勝之助の養子願が聞入れられ、御歩組への召出の請書は永原久兵衛(孝之)の名を付け、若年寄前田貞親が持参し、葛巻仲四郎を以て綱紀に上申したことが「手記」貞享4年3月24日条に見える。右永原はこの年4月10日に奏者番に、元禄9年9月に寺社奉行になる。この時の役職は正式には奏者番でないが、同役の仕事をしていたものとみられる。これをみる限り、藩医の一族の身分や役職に関しては、奏者番の役職の者→若年寄→奥小將→綱紀に上申という形で手続きがなされた。

なお、堀部養叔の嫡子養碩も医者で、山科長庵(「諸士系譜」では延宝9年600俵、元禄元年没)が病気のため、その代わりとして江戸へ参勤し、節姫の医療に従事するため、上屋敷内の塩川安左衛門の跡小屋に住むことになった(「手記」貞享5年4月6日、18日条)。

次に、金沢と江戸の関わりをみながら、江戸藩邸での医療と医者の概要について触れておく。貞享4年4月17日から翌5年5月晦日までの間、江戸での綱紀の主な病状を概観すると、4年5月より6月にかけて、左鼻の脇の頬に腫物が出来、熱と激しい頭痛、膿・咳・痰・清涕、肩凝り、脚痺れ、鳩尾痞え等に苦しみ、小用濁り、腹張り、鼻息臭く、脈が張るといった状態であった。これらに対する

綱紀の治療は、堀部養叔をはじめ、江戸の町医者中村玄悦・井関玄悦、坂井泰順などが担当し、杉山検校は鍼治療を行なっている。また、薬の調合は胃もたれを防ぐため「かす煎」と合わせ、煎生姜二分を入れて調進し、時には胸がすっきりするので砂糖水を召上がることもあった。7月から8月にかけては時折発熱があり、持病にも苦しみ、また、歯茎が腫れ、顔や頭にも激痛が走り、また、喉から胸の辺と背中辺りが痞えるといった状態で、丸薬3包、煎薬2貼も同じ日に投薬されることもあった。9月から12月にかけて、持病のほか、右脚「犢鼻」(揮)の下辺りが激痛となり、「腹騒」(下痢カ)、発熱、疝気(腹や腰が痛む病気)を患った。翌5年2月には再度御灸による痛み之苦しみ、相変わらず持病が出て、再び左歯茎が腫れ、白い膿のようなものも出て、鼻の左側まで痛みが襲った。

ここで、綱紀の持病は頭痛と痰、痞え(喉や胸が塞がる、また、そう感じる)であったことがわかる(「手記」貞享4年11月27日、12月2日条)。綱紀は長寿で藩政を主導した藩主として名高いが、持病等が「手記」に頻出しており、金沢在国中も江戸にても常にこれに悩まされたものとみられる。

なお、この時期江戸藩邸で藩士や姫などの医療に当たった医者は町医の中村玄悦、藩医の山科長庵、鈴木道倫・矢田周庵・江間口安・堀部養叔・堀部養碩・坂井泰順、さらに、杉山検校・山添宗積・吉田一庵(意安か)・木村養運のほか、山科理安・同順庵らであった。

綱紀の診療に関して金沢・江戸を問わず、ほぼ共通していえることは、「手記」に綱紀の様態について仰出されるには云々といったように記されており、まず、堀部養叔による問診から始まり、脈をとって診察し、時には飲み薬・御灸・鍼の治療方法に関し、綱紀自身の希望を受入れて治療が行なわれた。様態は天気にも左右されることもあり、快晴の日は心身ともに清快で、逆に悪天候や寒気に当たった場合、頭痛、痰・咳・鼻汁が出て、これら持病も悪化し、風邪を引き易く、また、ストレスか、虫歯によるものか、定かでないが、左の歯茎が腫れ易かった。

(2) 金沢城内での恭姫・豊姫の診療

寛永の大火後、創建された金沢城二ノ丸御殿については、綱紀治政の前半期、17世紀後半頃より二ノ丸西側の数寄屋丸の部屋方や女中らの住まいも徐々に建てられ、元禄9、10年ころにはほぼ完成した。同御殿中、子女は御広式、奥女中は数寄屋丸の御部屋方に住み、これらが「奥向」といわれた⁽²⁰⁾。おそらく、金谷御殿を含む前田家における奥向の女性たちの総人数とみられる「御広式女中」は、明治2年では254人いたと記録されている(金沢市立玉川図書館加越能文庫「陸原惟厚 備忘録 一」中「明治二年己巳春御家中知行并人員調理」)。詳細は今後の調査研究に期待されるが、金谷出丸の屋敷もあわせ、以下、貞享期を中心に城内での恭姫・豊姫の医療についてみていく。なお、金谷出丸は吉徳時代から子弟や側室のための住居が建立されたとする傾きもあるが⁽²¹⁾、すでに綱紀の時代における同人娘豊姫の居住空間になっていたことを次に確認していこう。

その前に[表3]にみるように、貞享2年3月藩老長尚連に嫁した綱紀の養女恭姫(実は七日市藩主前田利意娘、当時21歳)はその後もしばしば二ノ丸へ登城し、宿泊したことは、姫の逗留中の昼夜にわたる詰番が存在したことで明らかである(「手記」2巻)。したがって、同3年12月の恭姫の病氣治療の記事は、金沢城内におけるもので、熱、頭痛、腹が痞え、特に両頬にちかちかと赤味が有ったが、養叔が診断した結果、疱疹とは見えず、念のため薬は見合わせている。重病ではなかったようで、以後この患いの記載は見えず、当日養叔は恭姫から白銀を拝領している。この前後に端玄仙も恭姫の診療に関わっていたものとみられ、御歳暮の祝儀を恭姫から拝領し、請書を不破彦三(為貞、奏者番)・岡嶋一郎兵衛(元為、寺社奉行)宛に提出する。

なお、綱紀の当時8歳の江戸の娘、節姫について、翌4年正月及び3月末から4月にかけて、咳や腹が痞え、「いきり」(熱)有り、杉山検校が鍼治療をし、また、鈴木道倫・坂井泰順が診療するが、2日後には熱が下がり、痞えも快方に向い、薬は1日1貼とする。4月には再び右側に痞えが2回程有った。

綱紀が在府となった貞享4年6月、この年3月26日に誕生した綱紀と保寿院の娘豊姫(前田孝資妻)

[表3]金沢城内での恭姫・豊姫の診療と医者諸活動

(「前田貞親手記」「葛巻昌興日記」より作成。参考として江戸の節姫に関しては{ }で表記した)

年月日、主要記事
貞享3年12月22日恭姫一昨日より熱有り頭痛、御腹痛え、堀部養叔昨朝・今朝診療、両頬ちかちかと赤味出、御痘瘡とは見えず、葉見合わせ。右に付恭姫より白銀拝領。27日端玄川恭姫より歳暮祝儀拝領御請(26日付、不破彦三・岡嶋一郎兵衛宛)。
同4年正月(21日江戸節姫7日より15日迄御咳気の為山科長庵・鈴木道倫診療、葉調進、12日杉山検校右腹御瘡えに付鍼三本治療)。右旨菊池弥八郎・井上勘左衛門より大年寄三人衆宛上申。28日坂井泰順江戸へ発足の旨命。晦日泰順来月2日頃出立予定。
2月7日泰順出立の事命。11日山科長庵2月中に泰順と交代勤務の旨命。21日泰順16日不破彦三・岡嶋一郎兵衛宛書状、当8日金沢出立、15日江戸中屋敷参着、江戸節姫拝診にて御機嫌宜しき旨書面御覧に入る。24日山科長安江戸より帰着の旨上申。
{4月4日江戸節姫前月27日夜いきり、鈴木道倫・坂井泰順脈診、前月29日朝節姫診察、御瘡え少々快方、葉服用、熱下がる由道倫・泰順診断。食欲回復。葉一日一貼とする。杉山検校前月25日腹右に少々御瘡え有るとて針治療(3月27日・4月朔日も同様針治療)}。
【綱紀在江戸】6月14日金沢の豊姫の養育に付金谷御殿が宜しく、御作事等仰。17日金谷出丸の豊姫の御座敷の絵図御覧、房方は年寄女中一兩人、外女中は五、六人とするなど輕少にと申渡。29日金谷屋敷豊姫の御部屋絵図信濃が差上、湯殿等数多入れず、江戸藩邸・金沢御城の房方の様子を調査するよう命。
【同右】12月6日来年帰国の際は江戸へ山科長庵を召寄、金沢の豊姫の保養は養叔が担当、帰国直後は暫時坂井泰順が代勤の事決定。
貞享5年6月16日泰順月に一、二度豊姫診療の命。20日豊姫昨年より虚弱の由養叔口上、養叔の葉服用故、葉・御灸等養生の儀は御側女中と連絡を綿密にすべきと命。21日豊姫一昨夜御せわりかと小川申す。小児医師渡辺玖庵、長庵弟子明石立庵・岸田如安在番。22日右3人豊姫診療。誓詞申付。24日綱紀豊姫を見舞い、瘦せ、顔色宜くないと思召。小用多く御通じ有り。一昨日御せわり激しき事小川申す。養叔・立庵・如庵・休(玖)庵・玄仙・長庵が診療。佐渡も金谷御殿見舞。耀花丸を差上。25日豊姫御せわり強く、綱紀金谷へ御成り、養叔・玄仙・泰順・富山宗甫、町医師立庵、休庵、久保寿静診療。御鍼二本、牛黄円服用、御快寝。江戸山添道仙方へ御密丸取寄の旨書状遣す。26日豊姫御滞に付養叔や玄仙の葉等老中各詮議、長庵葉に付言上。目覚め前診察、いきり有る由養叔・玄仙・寿静上申。27日江戸より密丸届く。夜中快寝、いきり無し。せわり有り、脈拍数多い旨玄仙・養叔口上。頃日いきり有る旨女中言上。玄仙御葉加減、御針用いる。小用20回。29日、豊姫御灸別儀なし。御快方の御様子小川・中村・玄仙・寿静・養叔上申。
7月3日豊姫患いに付御宮辺甚右衛門坂上の時鐘を越後屋敷へ移す。4日豊姫夜前吐乳、御虫痛。6日吐乳。7日、京都へ医師呼寄に付御徒小頭ら一四人明日発足。10日豊姫吐乳一度、昨日迄渡辺玖庵御葉差上。13日豊姫快然、小水少々。昨日二三度。16日豊姫気色養生の為、京より医師津田寿軒到着。申刻金谷屋敷広式、御部屋へ参上、診察。18日豊姫夜中いきり、後快然。20日気色愈々御快気。
8月5日来年は養叔参勤に付、小児医師京都より召抱の旨命。以降豊姫吐乳続く。25日吐乳止まらず、山科理安御葉調進。28日理安上申により豊姫寝所に鍾馗の絵を掛け、邪鬼を払うため江戸藩邸から取寄せの事決定。(9月14日右届く)
10月12日、豊姫御快気。25日豊姫金谷屋敷より御病後初めて登城。八時半二ノ丸へ御移徙。供十数名の内御乗物脇に久保寿斎が随行。

は藩老前田佐渡(孝貞)邸で保育されていたが、今後は金谷御殿で養育するよう仰が有り、作事が申渡され、座敷の絵図を綱紀も御覧になり、房中は年寄女中一兩人のほか、女中は5、6人とするよう指示された。その訳は2、3歳に成長したら「御難儀」になるからで、「別館」が好いとする。また、城内の二ノ丸は狭いので金谷出丸が良く、池の際の御亭は「御文庫之御用」となっているが、湿気も取除き、湯殿等も数多くは入れないよう経済的に豪華さを戒めている。そのため清泰院(綱紀母、明暦2年没)存命の頃の江戸藩邸及び金沢城二ノ丸の房方の様子を調べるよう申渡された。当時金谷出丸は寛文頃設置の金谷文庫が、或いは延宝9年存在した書院・亭榭・馬場が、また、貞享元年1棟増築して6棟となった文庫があったという⁽²²⁾。これらに加え、渡部亮二家文書(小松市)「累代系図」により藩の御大工渡部伊兵衛珥知が延宝8年11月「金谷御屋敷御文庫建、同所御亭等出来相勤」め、

天和元年（延宝9）2月には「金谷御屋鋪馬場・御亭并御数奇屋干場出来御用相勤」めたことが確認できる。これらのことから、少なくとも寛文より貞享4年ころまでの金谷出丸は文庫や書院、御亭、馬場のみが有ったが、豊姫移住のため、同年6月以降に御屋敷の作事が開始されたものとみられる。因みに、「手記」（23巻）貞享5年11月18日条に「去年より金谷屋敷之御広式ニ四人充相詰」と見え、同屋敷の詰番が貞享4年より始まったことから、同時に前田家の一部の女性たちも居住したのであろうか。いずれにしても、金谷出丸が居住空間として機能し始めたのは貞享4、5年のこととみられ、前田家子女の金谷出丸居住は豊姫が最初とみることができよう。

すなわち、豊姫が前田佐渡邸より金谷に移ったのは、貞享5年6月であり、少なくともこの時まで金谷屋敷の豊姫の部屋が完成していたものとみられる。その前年、同4年12月、来年帰国の際は江戸へ山科長庵を呼寄せ、金沢の豊姫の保養は養叔に担当させるが、姫が馴れていないため人見知りを案じ、帰国直後は暫時坂井泰順を中心に診させるよう命有り。かくして、綱紀ら帰国後の貞享5年6月16日、前もって金沢に帰郷していた泰順は月に1、2度豊姫の診療を拝命する。以下、豊姫の診療の様子をみていこう。

同年6月20日、豊姫は昨年より少し虚弱になった由養叔が口上で述べ、薬・御灸等養生の儀は御側女中と連絡を綿密にすべきと命ぜられる。21日気色に別条ないが、一昨夜は「御せわり」（御機嫌悪く、むずがること）かと存じた旨を年寄女中の小川が申す。そこで長庵の弟子で小児科の町医者明石立庵・岸田如安、ほか藩医の渡辺玖庵が在番後、明日診療を拝命。22日、明石立庵・岸田如安と渡辺玖庵が豊姫を診療する。町奉行へ明石・岸田の誓詞の件を申付る。24日、豊姫を綱紀が御覧になり「御肉引御色相」宜くないと思召される。小用多く御通じ有り。一昨日御せわりが激しかったと小川が申す。養叔・立庵・如庵・休（玖）庵・玄仙・長庵が診療に当たる。佐渡も金谷御殿に御見舞に来り、御機嫌よく、色相も別条無く、「乳母之湿」に当たったのか吟味すべきと言上。耀花丸を差上る。25日、御せわり強く、綱紀も金谷へ御成り、医師を召寄るよう命ずる。これにより養叔・玄仙・泰順・富山宗甫、立庵・休庵・久保寿静参り診療。御鍼2本成し、牛黄円服用、五時過豊姫は快寝する。江戸の山添道仙方へ「御密丸」所望の旨の書状を早飛脚にて遣わす。26日豊姫御滞のため、養叔や玄仙の薬等につき老中各詮議、長庵が薬につき言上する。今朝目覚め前に診察の結果、いきり少し有る由養叔が診断し、続けて玄仙・寿静も同様に上申。養叔は先達て二ノ丸へ参上、「御むつかり」は御虫気の外「肝火」（癩癩のこと）等に依ると述べ、御薬調進後治り、様躰により鍼か練薬差上の旨を伺い、料簡次第と仰有り。27日江戸の山添道仙より来書、駒井与兵衛へ申置いた密丸届く。豊姫は快寝、今朝いきり無し。が、九時前せわり有り、脈拍数少々多いと玄仙・養叔が口上で報告。惣じて頃日昼頃よりいきり有る旨を女中が言上。玄仙は御薬加減し、御針を用いる。小用九時過迄20回有り。29日豊姫への御灸は問題なし。豊姫は久々佐渡宅に成長の所、此度金谷屋敷へ御移に付綱紀より御祝儀下さる。豊姫の快方の様子を小川・中村・玄仙・寿静が言上、「御同篇」と養叔も報告する。

しかし、同年7月3日、城内御宮辺の甚右衛門坂上にある時鐘が「金（谷）屋敷へ間近響」き、豊姫が「御煩敷」障りになっているゆえ、三十人頭へ談じ、手木の者迄動員し、「御急之事」として「当分」越後屋敷へこれに移した（「手記」20巻、「葛巻昌興日記」22巻）。その後同月の豊姫は吐乳数回、腹虫痛、いきり有り、渡部玖庵が薬を調進するが、小用少ない日や23度の日も有り。京より小児医師津田寿軒（藩医津田正流・寿軒（静嘉堂文庫「加州金府城下図」）らの祖か）を呼寄せる。町宿は石浦町和泉屋武兵衛方で、到着日に金谷御殿広式、御部屋へ参上し、豊姫を診察する。8月、来年は養叔が在府故、再び京より小児医師を呼寄せるよう仰せ。豊姫は依然数回吐乳有り、止まらない時は山科理安（「諸士系譜」では200石、元禄2年召出）が薬を調進する。また、理安の上申により、金谷御殿の豊姫の寝所に邪気を払うよう、鍾馗の絵を掛けるため、江戸藩邸より取寄せることとなり、9月に届く。こうして、同月26日山科理安の帰京に際し、白銀・羽織が下賜されており、漸く豊姫の様躰はほぼ安定したものとみられる。

以上のような幼い2歳の豊姫の一連の体調不良は、前田佐渡邸より金谷御殿への移住による環境の変化が主な原因となって自家中毒を引き起こしたものと推察される。かくして、同年（元禄元年）10月25日豊姫は二ノ丸へ移徙、その時の御供数十人の内御乗物脇に久保寿斎が随行する。因みに翌元禄2年閏正月27日、豊姫は金谷御殿の広式へ帰り、二ノ丸に居住したのはおよそ4ヵ月の短期間であった。

また、金沢・江戸を問わず、藩医の治療は前田家以外にも、貞享3年11月22日、藩老前田備後（直作）が「中症」を患い、左半分が不随、口元が右へゆがむといった症状に対し、久保定興が針治療し、また、同3年12月ころ、女中の患いにつき端玄川が療治し、さらに同4年9月21日、江戸にて御細工者加藤惣大夫の発病に対し、堀部養叔・坂井泰順が治療、同4年10月13日、江戸にて宝生九郎の母を養叔が診療するといった事例が確認できる。なお、右女中の名は誰か不明であり、治療を受けた場所も定かでない。が、勤務中に発病し、城内で治療を受けた可能性は否定できない。因みに、寛文七年図には城下の北西部で宮腰往還の南側（次号掲載予定、Ⅱ表、N-08-09）に女中中村の屋敷が確認され、ほかに金谷出丸の北側（総括論文、Ⅰ表、C-03-10）に女中「ミナミ」の名が記載され、また、延宝図の同地番に女中らが居住していたことがわかる。

おわりに

「寛文七年金沢図」にみえる医者について現段階で42人を確認した。この内、特に内総構堀の内側で、金沢城の北西部に密集して居住する長崎・江間・大石・加藤・坂井、藤田など8家は居住当初から、藩主前田家の医療担当者として重要な位置にあったものと推察され、さらに右の内、坂井家などは少なくとも延宝期より文献に見え、前田家の信頼性がもっとも篤く、一家の直接的治療に当たっていたことがわかった。また、藩医全体では、前田家や加賀藩周辺の人々の健康上緊急時にも応えるべく、金沢城の内及び外総構堀の内側乃至その近辺に屋敷を拝領した。さらに、「延宝金沢図」においても、藩医の多くが「寛文七年金沢図」と同一の屋敷地に、同一人か、その子や孫が居住していたことを確認した。次に、右2図にみえる藩医は、ほぼ同時期に作成された寛文11年侍帳等で照合すると、300石から小判10両など小禄の者までおり、「寛文七年金沢図」と右侍帳では4年の差があり、この間世代交代等による変化も有り得るため一概には言えないが、侍帳記載の24人の中には京詰などの者も含むものとみられるが、単純に両者を比較すると、図中の方が18人多いことがわかる。これは、侍帳が平士クラスを中心にし、御歩並クラスの藩医までは網羅してないこと等に起因しているものと思われる。このように考えると、「寛文七年金沢図」がこの時期における加賀藩の最大数の医者を示しており、図中における文字情報のもつ意義は大きいといわざるを得ない。ただし、11年の侍帳に記載の亨徳院や鈴木道倫など当時金沢居住者以外の者は寛文七年図に不記の場合もある点、指摘しておきたい。

一方、藩主綱紀は亨徳院を召抱え、また、杉山検校の治療を受けるなど当代一流の医者との関わりが深かった。貞享期までの金沢城内での医療について、江戸藩邸も含めた綱紀の場合をみると先の坂井家や書物奉行かつ藩医の小瀬家と親戚関係にある堀部養叔のような主治医的な藩医のほか、これを補佐する端玄仙や坂井泰順のような副主治医的な藩医がおり、その他町医者も臨時的に治療に加わることもあったこと、また、綱紀は頭痛と痰と痞えという持病があったことなどを確認した。さらに、長家へ嫁いだ後も二ノ丸へ登城滞留し同所で治療を受けた綱紀の養女恭姫のほか、金谷出丸における同人娘豊姫の医療・保養をみると、自らの病状を訴えるのに困難な乳幼児に対しては細心の注意・配慮がなされ、藩医のほかに数人の町医者が治療スタッフに加わり、ときには金沢から使者を派遣し、京より町医者と呼寄せたことがわかった。こうした綱紀や豊姫らに対する養叔や坂井泰順らの医療の関わり方が、この後元禄以降も連続性があるのか、否かについての追跡調査をはじめ、「延宝金沢図」を主体とした外総構堀の外側に関する調査や他の城下町絵図と照合の上で近世中後期の藩医についても、側近衆や重臣たちの日記などの史料を活用しながら彼らの動向に絡め見て行く必要がある。

次に、金谷出丸について寛文期から文庫や書院、御亭、馬場があったところ、藩老前田佐渡邸で誕

生していた豊姫の移住等を目指し、貞享4年金谷屋敷の作事が行なわれ、同広式の詰番も開始され、翌5年6月同姫の移徙に至った。このように、金谷出丸が前田家の居住空間として機能し始めるのは貞享4、5年頃であることを解明した。さらに、新御殿に移り住み、自家中毒を引き起こした幼い豊姫のために、時鐘を甚右衛門坂上から越後屋敷に移動させた。これら藩主前田家の保育・医療の過程で城内の施設が建築・移築する事例を紹介した。また、豊姫が前田佐渡邸で、のち、久丸が横山筑後(正房)邸でそれぞれ誕生するなど綱紀の子女の生誕地が重臣邸である背景には、二ノ丸や金谷出丸の居住空間が未整備で、狭小であったことを物語っている。さらに、敬姫は金谷で誕生し、豊姫とともに元禄2年5月段階で同所に居住していた様子が窺われ⁽²³⁾、その2年後両姫と同じ母を持つ利章(富五郎、四代大聖寺藩主)も金谷で誕生する。すなわち、貞享末から元禄期にかけ、金谷出丸が前田家の居住空間として、徐々に整備されていったことが推測される。今後二ノ丸や数寄屋丸の詳細な建造時期の問題、さらに幕末期慶寧の診療について「拝診日記」(元治元年8月、石川県立図書館蔵)に見える「御医者溜」とあるのは金沢城内のどの部屋に相当するのか、というような医者に関わる問題や子女の養育などを中心とした金沢城内の各部署・施設の築造や利用についても今後の課題となった。

以上、「寛文七年金沢図」記載の医者42人の内、ほぼ20年後の貞享期まで、金沢城内での藩主及び姫の医療に携わった藤田玄仙、坂井就安の孫泰順、堀部養叔、矢田周閑・磯野玄察・渡部休庵・黒川覚針、江間竹林坊弟口安、久保寿斎、同嫡子寿静などの事例をみてきたが、その他の医者はどのような仕事に当たっていたのか。幕末・維新时期まで含めて近世広く藩医の役割をみた場合、藩主家の医療を中心に、藩士や加賀藩周辺の人物の治療のほか、例えば南部藩(盛岡市中央公民館蔵、南部家図書「御城廻御修補 全」元文6年6月8日条)や熊本藩などと同様、各城内の造営普請人の治療⁽²⁴⁾、また、御救小屋への勤務、或いは流行病予防・手当のため在方への派遣、戦陣における藩医・家中医らの治療の問題があり⁽²⁵⁾、さらに維新时期北越戦争でのウイリスによる戦陣医学⁽²⁶⁾の一端が藩医の由緒一類附帳にみられるなど藩政との関わりが確認される。これらは具体的にどのように行なわれたのか、今後の課題が残された。

[註]

- (1) 矢守一彦『都市プランの研究』大明堂、昭和45年。高沢裕一・中野節子「城下町金沢の形成」(『金沢城と前田氏領国の諸城』名著出版、昭和60年)。吉田伸之「近世の城下町・江戸から金沢へ」(週刊朝日百科、『日本の歴史 別冊・歴史の読み方2』昭和63年)。高橋康夫・吉田伸之『日本都市史入門』、東京大学出版会、平成2～5年。高橋康夫ほか編『図集 日本都市史』東京大学出版会、平成13年。木越隆三「『延宝金沢図』にみる城下町の空間構造—武家屋敷地の配置を中心に—」(『年報 都市史研究』14号、平成18年)。増田達男「『延宝金沢図』にみる城下町の空間構造—身分別住居地の配置構成から—」(『同』)。木越隆三「城下町の中に城下町を築く」(『北國文華』35号、北國新聞社、平成20年3月)など。
- (2) 木越隆三・池田仁子「藩老横山家の3枚の下屋敷図について」(石川県金沢城調査研究所『研究紀要 金沢城研究』6号、平成20年)。
- (3) 田中喜男『城下町金沢』日本書院、昭和44年、同『加賀藩における都市の研究』文一総合出版、昭和53年。池田仁子「金沢城代横山家と重臣—加賀藩藩老と陪臣にみる城下町の生活—」(『研究紀要 金沢城研究』7号、平成21年)など。
- (4) 池田仁子「医者と暮らしの諸相」(19世紀加賀藩「技術文化」研究会『時代に挑んだ科学者たち』北國新聞社、平成21年)。ほか、医者の種類として藤内医がおり、これに関する文献については木越隆三氏に御教示いただいた(田中喜男『加賀藩被差別部落史研究』明石書店、昭和61年、87・644頁など)。なお、これについては史料・史実に則し取り上げたもので、差別を容認するものではない。
- (5) 前川哲朗氏による以下の諸論文、「痘瘡・コレラの流行と対策—藩政期疫病史の試み—」(『市史かなざわ』6号、平成12年)、「藩政期村方における疾病と医療活動」(『同』10号、平成15年)、「藩政期麻疹の流行と乳母さがし—喜多一二郎義寛の日記からみる—」(加能地域史研究会『地域社会の歴史と人物』北國新聞社、平成20年)。

- (6) 池田仁子「加賀藩蘭学と医者との動向」(『北陸史学』55号、平成18年)、白峰旬「文化期金沢城二の丸再建工事期間中における労務管理に関する考察—『御造営方日並記』の内容分析から—」(石川県金沢城調査研究所『研究紀要 金沢城研究』7号、平成21年)。
- (7) 池田仁子「金沢城代横山家出生にみる家臣と医者と女性」(石川県金沢城調査研究所『研究紀要 金沢城研究』6号、平成20年)。竹松幸香「加賀藩上級武士の疾病・医療について」(『加能地域史』47号、平成20年)。
- (8) 片桐一男『蘭学、その江戸と北陸』思文閣出版、平成7年。沼田次郎『洋学』吉川弘文館、平成8年。津田進三「加賀藩最初の蘭方藩医藤井方亭について」(『石川郷土史学会々誌』6号、昭和48年)、同「日本最初の蘭方内科医吉田長淑」(『同』8号、昭和50年)。池田仁子「金子鶴村の蘭学と海外・科学知識—化政期加賀藩蘭学受容の一側面—」(『日本歴史』698号、平成18年7月)、同「大高元哲の事績をめぐって—加賀藩蘭学の受容と展開—」(加能地域史研究会『地域社会の歴史と人物』北國新聞社、平成20年)など。
- (9) 酒井シズ『病が語る日本史』講談社、平成14年、279頁。
- (10) 日置謙『加能郷土辞彙』改訂増補版、北國出版社、昭和48年、「内山覚中」の項。
- (11) 『金沢市史 通史編2 近世』金沢市、平成17年、272頁。
- (12) 本稿では亨徳院・今大路・曲直瀬について、ほかに高柳光寿ほか編『新訂 寛政重修諸家譜』10巻・19巻(続群書類完成会、昭和56年)、『国史大辞典』13巻(吉川弘文館、平成4年)、多留淳文「北陸における曲直瀬家の系譜—その医学的意義—」(『北陸医史』5巻2号、昭和59年3月)を参照した。
- (13) 前掲(10)日置著、「坂井泰順」の項。
- (14) 石野友康「藩政の成立と展開」(『野々市町史 通史編』石川県野々市町、平成18年、282~283頁)。
- (15) 酒井シズ『絵で読む江戸の病と養生』講談社、平成15年、82頁。
- (16) 石野友康『「葛巻昌興日記」にみる金沢城二ノ丸御殿の呼称と用途』(『研究紀要 金沢城研究』5号、石川県教育委員会金沢城研究調査室、平成19年)。金沢城調査研究所『よみがえる金沢城』二、石川県教育委員会、平成21年、30~31頁。
- (17) 前掲(9)酒井著、104頁。
- (18) 松方冬子「加賀藩の機構と江戸家老」(『史学雑誌』102編9号、平成5年9月、29頁)。石野友康「年寄・家老・若年寄」(『金沢市史 資料編4』金沢市、平成13年、311頁)、木越隆三「年寄衆八家と役方・組方」(『同 通史編2』金沢市、平成17年、330・331頁)。なお、初期の加賀藩政や金沢城について関連史料も含め、木越・石野の両氏に多くの御教示を賜った。
- (19) 前掲(18)『金沢市史 資料編4』564頁。
- (20) 前掲(16)『よみがえる金沢城』二、32~35頁。
- (21) 前掲(10)日置著「金谷御殿」の項。前掲(18)『金沢市史 通史編2』198頁。
- (22) 前掲(10)日置著「金谷御殿」の項。金沢城研究調査室『よみがえる金沢城—四五〇年の歴史を歩む—』石川県教育委員会、平成18年、76頁。
- (23) 前田育徳会『加賀藩史料』五編、清文堂出版、昭和55年、22頁。
- (24) 前掲(4)池田、27~28頁。
- (25) 軍粧・軍事と医者との関わりについては、木越隆三・池田仁子「横山家の家臣団と家中統制」中、池田「明治元年の分限帳にみる横山家中」(石川県金沢城調査研究室『金沢城代と横山家文書の研究』平成19年、49頁)。
- (26) 吉良枝郎『幕末から廃藩置県までの西洋医学』築地書館、平成17年、144頁。

[付記]

本稿執筆に当たり、金沢城調査研究所の木越隆三・北川晴夫・石野友康の各氏に大変お世話になった。衷心より感謝申し上げたい。